



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コミュニティの拡張としての地域復興の論理 : 亙理いちごっこにおける「人間の復興」理念を手がかりに
Author(s)	山田, 航平
Citation	社会教育研究, 32, 79-89
Issue Date	2014-04-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55329
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00231372_31_07.pdf



コミュニティの拡張としての地域復興の論理 ―亙理いちごっこにおける「人間の復興」理念を手がかりに―

山 田 航 平*

目 次

1. 課題と方法	79
2. I期：コミュニティの萌芽——生き残った意味を見出す	81
3. II期：コミュニティの発展——ニーズの多様化とその課題	83
4. III期：コミュニティの拡張——多様な生き方を支えるコミュニティ	84
(1) 生き方を通すことが難しくなる	84
(2) 生き方を通すために	85
5. 結論	85

1. 課題と方法

東日本大震災から約3年が経ち、いわゆる「絆」の重要性が再確認されつつあるが、その一方で、政府をはじめとした各自治体において、こうした絆を含めたつながりや地域のコミュニティが、本来政府の果たすべき役割を代替するものとしてすり替えられており¹、これらの概念の問い直しは免れない。

当時の菅政権が示した東日本大震災における復興政策（以下、復興構想会議提言）の指針は、復興において、地域のコミュニティにおける共助関係を基盤とし、その基盤を支える「公助」のあり方を提示した。ここでの「共助」とは、「従来の地域のコミュニティを核とした支え合い」であり、『人々の絆やつながり』という日本人と日本社会にある底力²であるという位置づけである³。このように、復興構想会議提言は、「自助」や「共助」が機能する事を前提としているが⁴、コミュニティの衰退や希薄化が問題となっている現在においては⁴、地域内のつながりやコミュニティが機能しない場合が考えられる。このように考えた時、復興構想会議提言が「底力」と評する「絆」と、現実とには、乖離があり、同提言が成り立たない可能性も考えられるとしてよいだろう。

* 修士課程修了

また、現在まで議論されてきた歴史的な復興理念においても、既にあったコミュニティが機能する事が前提となっており、それらコミュニティが機能する条件については明確ではない。例えば、中越大震災からの復興にあたって、山古志村が「人間の復興」理念⁵のモデルとされているが、その要因は、農山村部に元々あったコミュニティが、機能した結果であるという分析に留まっている⁶。

これに対して、東日本大震災がもたらした被害は広範囲にわたり、コミュニティが希薄になりつつある地域や、過疎化が進む地域も含まれていた。また、それらの地域で復旧時において、コミュニティが機能せず、コミュニティが分断⁷していく地域があった事も指摘されている⁸。その点は、コミュニティを形成しつつ、復旧や復興を目指す過程と条件を明らかにする事が必要であろう。

したがって、本論の課題は、コミュニティを形成し、またそれを広げながら地域復興を進める論理を、明らかにする事である。

事例分析の対象は、亘理いちごっこの支援実践を取り上げる。亘理いちごっこは、東日本大震災の被災者とボランティアへの支援を目的に誕生した宮城県の NPO 団体である。震災から2か月経った5月に活動が始まり、NPO 法人の認定は、震災年の12月になされた⁹。設立の主旨は、次の通りである。

地域住民、そしてその地域を支えようとして下さっている方々と共に手を携え、震災地域の再起を図る。ひいては、被災地のみならず、全国、世界にコミュニティの輪を広げていく。

いちごっこの活動は、第一に、いちごっこの建物内で、利用者（客）同士が交流し合うという活動にまとめられる。カフェレストランとして、全国から送られる支援食材や、地元農家や漁師から仕入れた食材を調理し提供する。放課後に小中学生を補習する「寺子屋いちごっこ」や、母子が集まる「ままサロン」、趣味の時間を過ごして落ち着きを取り戻す「手芸サークル」もここに含まれるだろう。

第二に、いちごっこから外へ出向く活動である。傾聴活動をする「いちごっこお話聞き隊」は、カフェレストランに来る人びとだけでなく、仮設住宅や、みなし仮設、被災家屋に住む被災者を活動対象の中心とし、戸別に訪問する。それら町民を集めて互いに傾聴する「いちごっこお茶のみサロン」も並行して行っている。高齢者の見守り活動も、ここに含まれるだろう。

第三に、亘理町内外の人びとや、全国のボランティアが集まる「亘理ホームカミングデー」や、「いちごっこマルシェ」がある。

着目した点としては、第一に、震災の直後から現在まで活動を続ける団体であり、東日本大震災の支援団体の中では比較的長く活動している点である。この点は、団体のミッションが素早く移り変わる中で、それに対応してコミュニティが変化してきた点や、豊富なネットワークを既に形成している点が確認できる事から、課題であるコミュニティの拡張の様子を浮き彫りに出来ると考えた。

第二に、復興過程において外部のボランティアの参加を意識し、開放性とフラットな活動形態を維持している点である。この点は、外部ボランティアがコミュニティを拡張させる要因になるとい

う点において重要である。

第三に、団体の根本に、地域が大きな家族となって支え合うという理念があり、一人ひとりの思いが重視される点である。この点は、「人間の復興」理念に当てはまる点において、先行研究を踏まえる事が出来ると考えた。

分析は、2011年4月から2013年11月までのいちごっこの活動期間を、3つの区分とし、「Ⅰ期：コミュニティの萌芽」、「Ⅱ期：コミュニティの発展」、「Ⅲ期：コミュニティの拡張」に分け、それぞれの機能を明らかにしながら、コミュニティの特徴と展開を追う事とする（P.8～P.9にある分析結果の表を参照されたい）。

同時に、津波の被災者であり、いちごっこのメンバーである C1 と C2 が、いちごっこのコミュニティと共にどのような変化があったのかについても明らかにしたい。

なお、本論で使用する「ネットワーク」とは、関係性がある事を示したものであり、個人と個人、個人と集団、集団と集団などに当てはまる。「コミュニティ」とは、何かが共有されている範囲を示すものとする。ネットワークに枠をつけ、区切ったものをコミュニティとする。

2. Ⅰ期：コミュニティの萌芽——生き残った意味を見出す

Ⅰ期は、いちごっこが、被災者に食事を無償で提供する事と、被災者同士で傾聴する事をミッションの中心としていた時期であり、震災が起きた当日から、震災年の12月までのおよそ9か月の期間である。

この時期における被災者のニーズは、衣食住の支援はもちろんの事であり、特に津波による被災者の中には、心の傷を負った状態から自力で立ち直る事が出来ず、生き残った意味を、自分自身で問うた場合もあった。これらは、精神的な回復を求めるといふ被災直後のニーズと言ってよいだろう。

こうした被災者のニーズを背景にして、いちごっこでは、食事を無償提供する支援を起点とし、被災者が語り合う活動を働きかけ、被災者の回復を支えた。

以下では、いちごっこの活動である手芸サークルのメンバーである C1 と C2 のニーズの変化を追ひ、生き方を問い直すプロセスを明らかにする。

いちごっこでは手芸サークルが、震災の年の10月末に始まった。手芸サークルでは、手芸が好きな女性が、10人から20人ほど定期的に集まって、2時間ほど話をしながら編み物や縫い物をする。

手芸サークルの中には、被災後にいちごっこで出会った人びとに助けられ、その恩返しをしていく事が自らの人生を良く生きる事であるという生き方を見出したメンバーC1やC2が居る。C1は、手芸サークルの立ち上げに関わったメンバーであり、C2は、その後、手芸サークルに入ったメンバーである。

C1 は、震災の後から、自身の人生を生きる意味を見失っていた。

C1「私は地震で死んだのだと。私の人生はあの時終わったんだと。じゃあこれからの人生をどのように生きようかと思った（略）」

C1 は、いちごっこに通い始めて、ニーズが変化していった。C1 は、亘理町の仮設住宅に住む人々と知り合い、同じ被災者である事を実感した。

C1「（いちごっこには）救われたという思い。多くの人と出会う事が出来た。（略）同じような思いの人たちといっぱいお話が出来た事。私一人じゃないんだって思いが強くなったから。」

C1 は、友達から物資を貰い、身の上話をし合う中で、C1 は、誰かを助け、自身が出来る事をしたと気持ちがある事に気づいた。支援を受け、交流したいというニーズは常に持ちつつも、恩返しをしたいというニーズが顕在化したといえるだろう。

C1「いちごっこに来て全然関係の無い仮設（住宅）の方から物を頂いたり、優しい言葉をかけて頂いたりして、自分が受けたら他人に返さなくてはいけないし、Aさんから何かして頂いたら、Aさんにだけ返さなくてはいけないという事ではなくて、相手を選ばず自分が出来る事をしてあげようって。」

その後、その恩返しをしたいというニーズは、元々C1 にあった息子のために生きるという気持ちを、震災後に失われていた生きる意味として見出した。さらに、楽しく豊かに生きていく生き方を目指す事に至った。

C1「いちごっこに毎日通うようになって、息子が、お母さんボランティアでやってお金も貰わないで何が楽しいのって言うんです。お金を貰わなくても、みんなで話が出来から楽しいんだって言ったら、うん、お母さん楽しければそれでいいんじゃないって。だから、その言葉を聞いた時、私はあの時死んだはずなんだけど、息子のために生きようと。私が楽しく生きれば、息子だって嬉しく思うはずだし、そういう風に考えが変わったのは、いちごっこに来て（震災の年の）9月10月くらいからだと思います。だから、私が出来た事は何かを考えてきた。（略）頑張って、楽しく豊かに生きようと。」

C2 も同様に、いちごっこで出会った人びとと語り合ううちに、生きる意味を見出した。C2 は、亘理町に住む農家で、津波を受けて住宅が全壊と認定され、仮設住宅に入居していた。

C2「（自宅の向かいの）その家の方が2人亡くなって。私も（もしも津波が来た時に）ここにいたらたぶん死んでるのね。もちろんそれは。でもどういいうわけか生き残った。まだやらない事がない事が自分には残ってるんだらうなって思うから。（略）今、自分が出来ること。明日が無いかもしれないということを震災ですごく感じた。未来も明日もあるもんだと思ってたじゃないですか。でもそれって一瞬で無くすもんなんだなって感じた。」

C1 の「相手を選ばず自分が出来る事をしてあげたい」と思う気持ちや、C2 の「まだやらない事がない事が自分には残ってる」と思う気持ちを、本論では「恩返し」のニーズとして、その変化

を取り上げていきたい。「恩返し」は、被災者それぞれの生き方としての手段や目的となったり、生きる意味として問い直されるため、本論では、重要な着目点となる。

3. II期：コミュニティの発展——ニーズの多様化とその課題

いちごっこは、食事の無償提供や、傾聴による回復支援をミッションとしていたI期から移行し、様々な人が集まるプラットフォームづくりをミッションの中心とした。その経緯は、ホームカミングデー（お祭り）を通して、亘理町民と亘理町外から入っているボランティア（以下、外部ボランティア）が集まる場を作り出す事に、新たな支援の意味を見出したからである。いちごっこが外部ボランティアと、プラットフォームで出会う事で、様々な情報交換が行われ、特に亘理町民のニーズや、いちごっこの支援のためのニーズが、外部ボランティアに共有された。

外部のボランティアがいちごっこと共に、被災者のニーズを共有し、様々なニーズに対応してきた段階を迎えたが、一方で、それ故に、いちごっこは、支援活動と並行して、外部ボランティアへの対応を行う必要が出てきた。

また、支援対象の多様化によって、本来いちごっこが行ってきた被災者への支援が疎かになったという批判が挙がった。被災者のニーズは生活環境によって様々であるが、例えば、亘理町民の中でも、「浜と丘」で被害の差があり、より被害が大きい津波の被災者を支援すべきであるという意見がある。

さらに、被災者のニーズは、被災直後から移り変わってきており、いちごっこがそういったニーズに対応できていないという批判も挙がっている。

C2「手芸サークルを始めた頃の、震災が一年もたたない頃と震災から2年以上たった今では、集まって来る気持ちが違う。変わってきているような。その頃って、集まれる場所も無ければ、戻る家も無いですね、仮設とかですから。（C2の仮設の）うちに行くのも狭いですから、ここ（いちごっこ）は、唯一、人が集まれる場所だったと思うんですけど。自宅なおして戻った人、新しく家を建てた人は、仮設から結構出てますよね。その状況で、別にここ（いちごっこ）じゃなくてもいいわけですね。（略）難しいね、だから。でもだから色んな人と出会って、辞めてって。来ない人もいっぱいいるけどね。」

C1「来ない人の中には、ちゃんと仕事が決まったから、忙しくて来られなくなってしまったとか」

C2「新しく家を建てたから、遠くなって。うちもそう。」

このように、対応するニーズの多様化と、ニーズの移り変わりによって、いちごっこが被災者の支援団体として目指すべき支援対象が、外から見えづらくなったと整理できる。また、C2が、集まる場所は、いちごっこじゃなくて良いと話している事から、いちごっこには新たな意味が必要となった段階だと言えるだろう。

4. Ⅲ期：コミュニティの拡張——多様な生き方を支えるコミュニティ

Ⅲ期の特徴とは、いちごっこのコミュニティは、支援の枠に収まらず、生き方を支える機能をコミュニティとして担う事にある。

（1）生き方を通すことが難しくなる

手芸サークルができた2カ月後の12月末に、手芸サークルでたわしや、ストラップ等を作り、全国へ販売する事になった。グッズの販売が決まった事によって、メンバーは、手芸サークルに様々な関わり方が出来るようになった。材料を家に持ち帰って、製作し、そのグッズをまとめて、いちごっこに持って来るメンバーや、空いた時間を使って、いちごっこで談笑しながら、販売のためにグッズを製作するメンバーも居た。

このグッズ販売を続ける中で、メンバーからは、収入を得られ、喜ぶ気持ちがある一方で、賃金を貰う事で労働上の責任が生まれ、従来の落ち着いた時間を過ごす事が出来なくなったという意見が出た。手芸サークルでは、グッズ販売を作る時間とは別に、従来から続けてきた趣味の編み物をするだけの時間を定期的に作った。このような経緯から、C1やC2にとって、手芸サークルに居る意味が、従来から続いた趣味や交流を楽しむ事から、製作物によって相手に喜んで貰いたいという恩返し of の気持ちへと、より強まって行った。

C2「何のために（編み物を）作るかって、私たちはお金を得るためじゃなくて、寂しさや何かを紛らわすためとか、心が落ち着くような時間が欲しいから、集まって作ってたんであって。

（略）売るとなると目的がまた変わってきますよね。お金を得る手段になってきて。（略）ある程度、自分で好きな事やった方が、色々プレッシャー抱えるよりも、自分の好きな物の方が、楽しいもんね。」

さらに、賃金を得るよりも、喜んで貰う人にあげた方が製作者として嬉しいという。

C1「私の作った物はお金出して買ってもらうほど、上手な物じゃないから。お金を貰うくらいなら、相手にあげて喜んでもらう方がいいという思いだから。あれを織っている間、私自身は楽しかったから。手作りする人ってそういうもんだと思う。」

このように、C1やC2にとって、販売する事は、恩返しの手段とはならなかった。グッズ販売を通じて形成された手芸サークルでは、C1やC2のような生き方を通す事は難しくなっていた。

C2「私たちはどうしたらよいのかな。いちごっこで活動した方がいいのか、もっと違う活動になった方がいいのか。本当に好きな人たちが集まって、何か手作業するような。それって、お金を生み出すんじゃなくて、好きな事を趣味でするような。」

（２）生き方を通すために

生き方を通すことが難しくなった局面において、C1やC2が生き方を通すために、恩返しをする先は、手芸サークル内に留まらず、手芸をツールとして、手芸サークル以外の人びとに対して向けられてきた事で、その難しさは解消していった。

C2「名取の仮設に住んでいるおばあちゃんが、手編みの腹巻がほしかったみたいで。たまたま話があって。みんなで腹巻編んでね。毛糸ももらった方とか、布ももらった方とかに作って、なにかお礼状を送ったり。なんかそれも楽しいのかもしれないですよ。（略）結構そうやってね、つながっていく人がいて。」

また、C2は、手芸をツールとしなくても、出来る事であれば恩返しの対象としてきた。ホームカミングデーで知り合ったボランティアを、津波の被害を受けた自宅に案内した。

C2「いろんな人から応援して貰って。今、私がやれることってボランティアの人を泊める事だとか。（略）（ボランティアが）地域に来てくれてるのに、今できること、私たちにできることはちょっとですよ。そのちょっとしたこと、ひとつひとつがつながっているわけ。いろんなところから来る方と繋がるわけ。だから、馬場さん（いちごっこの代表理事）を通して出会った人なんで、馬場さんのところは一つの出会いを与えてくれたところだから、その馬場さんに私がしてあげられることってことでお手伝いしてる。」

このようにして、C2は、手芸サークルのメンバーの知り合いや、外部のボランティアへの交流と支援を通して、自らの生き方を通してきた。

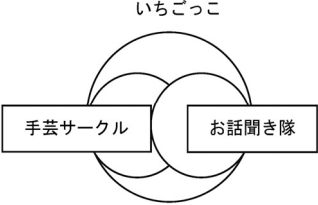
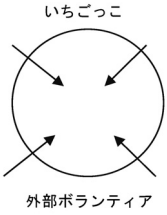
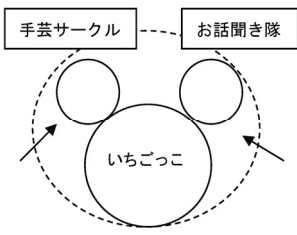
C1は、新たなスキルを獲得して、いちごっこの部屋を借りて、手芸サークルとはまた別に、個人で手芸教室を開くようになった。「さをり織り」の講座を受講して、新たなスキルを身に付ける事によって、いちごっこで手芸教室を開き、手芸サークルに来るメンバーとはまた別の受講者が参加するようになり、C1にとっては、手芸サークルを通さずに、恩返しをしている実感を得られる事となった。

C1「（さをり織りを）教えるという事ではなくて、何か困っている人がいたら、助けようという気持ちがあるし、一緒にやろうっていう気持ちだから。」

C1は、いちごっこでは恩返しをしつつ、他に仕事場を見つけないかと思っていた。2012年の8月から瓦礫処理場での仕事があったが、半年で雇用が終わってしまった¹⁰。その後、いちごっこを通じて、2013年の11月から、隣町のNPOで仕事が貰えた。

5. 結論

これまで述べてきたコミュニティの過程を、次ページの表のように整理した。

区分	コミュニティの特徴	コミュニティの機能	コミュニティの図式	ニーズの変化	生き方の変化
I	コミュニティの萌芽 (震災年5月～同年12月まで)	・生存や精神的な回復を支える。 ・震災後に生き方を見出す。	・一つの大きなコミュニティが形成された。 	C1: 行政から支援を得たい。物資の支援は、特に趣味である手芸をするための用品が欲しい。人と交流したい C2: 趣味である手芸をして、落ち着きを取り戻し、楽しい時間を過ごしたい。	C1: 楽しく豊かに生きていく生き方を目指す事。自分が受けたら他人に返さなくてはならない。相手を選ばず自分が出来る事をしてあげよう。 C2: 今、自分ができたいことをしたい。明日が無いかもしれないということを震災ですごく感じた。未来も明日もあるもんだと思ってたが、一瞬で無くすもんなんだなって感じた。
II	コミュニティの発展 (2012年1月～翌年3月まで)	・多様な人びとが集まるプラットフォーム。 ・被災者のニーズを満たすために、外部ボランティアがリソースとなる。	・外部ボランティアがいちごっこに入り、コミュニティは発展した。 	該当なし	該当なし
III	コミュニティの拡張 (2013年3月～同年12月まで)	・被災者の主体形成 ・被災者のケイパビリティを高める	・新しいコミュニティが外に出て拡張した 	C1: 貯蓄のための収入を得たい。恩返しのためにいろいろな事を習得したい。人を助けて恩返しをしたい。 C2: 出会った御縁に対して、今できる事をしてあげたい。農業を再建させたい。	C1: 新たなスキルを得て教室を開き、手芸サークルを通さずに、恩返しをしている実感を得た C2: 多様な人びととの出会いに感謝しつつ、その人びとへ今できる事をしようとする生き方。 C1&C2: 生き方を通すことが難しくなった局面において、C1やC2が生き方を通すために、恩返しをする先は、手芸サークル内に留まらず、手芸をツールとして、手芸サークル以外の人びとに対して、向けられてきた事で、その難しさは解消していった。

第Ⅰ期である「コミュニティの萌芽」期におけるコミュニティの特徴は、回復を支える機能を備えていた事である。震災の直後に C1 と C2 は、手芸サークル内で交流する事を通して、生活再建をしながらも、それぞれ新たに生きる意味を見出した。まず C1 は、恩返しをしながら「豊かに楽しく」生きる事を見出した。C2 は、多様な人びととの出会いに感謝しつつ、その人びとへ今できる事をしようとする生き方を見出した。

第Ⅱ期である「コミュニティの発展期」の特徴は、第一に、いちごっこで主催していたお祭りに似たイベント「ホームカミングデー」によって、いちごっこのメンバーは、外部ボランティア（亘理町外から来るボランティア）の意義に気づき、それらを含めた様々な人が集まるプラットフォームづくりを新たなミッションに設定した事、第二に、それ故に、いちごっこが対象とする被災者のニーズは移り変わり、多様化し、加えて、様々な対象に働きかけを行うようになったため、いちごっこが支援すべき対象が見えづらくなった事である。

外部のボランティアを取り入れる事で、いちごっこと外部のNPOや、亘理町内のNPOとのネットワークも増え、いちごっこのネットワークは厚みを増し、被災者のニーズを共有するコミュニティが発展していった。それを通して、C1とC2は、多様な人びとと出会った。

外部との行き来が行われ、コミュニティが発展した一方で、支援対象とするニーズは多様化し、支援対象が絞れず、コミュニティが成り立つためのニーズは、共有が難しくなった。また、生活の復旧が進む中で、従来のニーズは移り変わり、いちごっこでは新たな意味が模索される段階に入った。

第Ⅲ期である「コミュニティの拡張期」の特徴は、第一に、住民が生き方を貫く主体として、個々が人生の意味や、生き方の方向性を模索しつつあり、その震災前や震災後に見出した自分の生き方を再建する基盤を支える機能をいちごっこが担っている事だ。

震災後に見出した生き方は、今後の生活再建や復興を続けていく時の基盤となるものとして位置づけられるのではないかと考えられる。なぜなら、C1やC2がいちごっこで活動する意味は、いくつもある中で、その生き方を貫くためにあり、C1やC2は、被災後に見出した生き方を、常に問い直しつつ生活しているからである。

C1とC2のニーズは、コミュニティでその都度、共有されているため、C1やC2は、いちごっこで恩返しができなくなっても、外部のネットワークで恩返しの対象を御縁としていわば必然的に出会い、恩返しする生き方を通す事ができた。このようにして、ネットワークが厚みを増し、被災者のニーズを共有する事で、コミュニティは、被災者の生活再建を担う機能を得た。C1のように自分の趣味を活かしながら、多様で個性的な個々の生活を創り上げていく自由度を拡張していき、いちごっこがその自由度を拡張する基盤として機能している。

ここで焦点としたいのは、Ⅱ期とⅢ期のコミュニティの発展期と拡張期の違いである。

第Ⅱ期までは、いちごっこのコミュニティを外部ボランティアが構成する事によって、コミュニティ自体が大きくなり、活動形態を変化させるに至った。つまり、Ⅱ期では、いちごっことしての

一つのコミュニティが発展したと分析できる。

これに対して、Ⅲ期のいちごっこのコミュニティは、それまでいちごっこ内のコミュニティとして構成していた手芸サークルが、新しいコミュニティとしていちごっこの外へ、出て行ったと分析できる。つまり、いちごっこを媒介せずとも、他の NPO や外部ボランティアが手芸サークルを構成しており、この手芸サークルも同様に、いちごっこを構成している。

したがって、以前からいちごっこ内にあったコミュニティが、いちごっこの外へ出て、それらが、同じようにいちごっこを形成している。このように考えると、新しいコミュニティが外へ生まれた分だけ、いちごっこのコミュニティは拡張していると考えられる。これが、Ⅱ期の「期」とⅢ期の「拡張期」の特徴の違いである。

これらをまとめると、コミュニティの拡張過程に伴って、C1 や C2 のケイパビリティが高まったと言えるのではないだろうか¹¹。コミュニティの拡張は、同時に、コミュニティ内のリソースが拡張し、ケイパビリティが高まる範囲も拡張すると言える。コミュニティ内のケイパビリティを通して、C1 のように豊かに楽しく生きるという生き方の自由が生まれていると考えられる。コミュニティとネットワークの組み合わせの中で自由度が広がり、それ全体がコミュニティを形成する事で、さらに自由度を高めている。その自由度を高めていく拡張が、地域全体の多様性のある復興の在り方である。

¹ 内橋克人、2012、『『社会変革の力』としての協同』、『世界』NO.836、以下を参照。「社会保障とは、自助、共助を待つまでもなく、公が担うべき正統な政府機能である。加えて、それが『絆』という言葉にすりかえられた」、「新自由主義によって社会的統合が失われた個がバラバラになると今度は、本当の意味で公がなすべき、正統な政府機能を發揮して人間復興に当たろうというのではなく、個人、かつての家族制度、村制度、地縁・血縁、これらによって人間復興を成し遂げなさいという、これが『絆』の正体である」

² 2011、東日本大震災復興構想会議「復興への提言～悲惨のなかの希望～」

³ 例えば、日野秀逸、2011、P.53、『『被災者目線』の復興論——東北の生活現場から考える』、新日本出版社

⁴ 例えば、岡田知弘、2012、『震災からの地域再生 人間の復興か惨事便乗型「構造改革」か』、新日本出版社

⁵ 住民の生存権の保障をしつつ、住民が生存するための基盤を復興する事を目指す理念

⁶ 岡田知弘、2012、『震災からの地域再生 人間の復興か惨事便乗型「構造改革」か』、P.142、新日本出版社

⁷ ここでの分断とは、閉鎖的・同質的コミュニティが不断のプロセスとして進むものとする。分断によって、同じ社会的属性や諸資本を形成する人びと同士が、コミュニティを形成するため、人びとの社会的属性は、コミュニティの参加と切っても切れない関係となる。推論の域を脱しえないが、どのコミュニティへも参加できない人びとが出てくると考えた場合、一時的であれ、コミュニティの閉鎖性や同質性は課題となるだろう。

⁸ 例えば、集団移転を進める仙台市若林区荒浜の実行委員会の事例など。参考文献としては、中村信義、2012、「集団移転。交わらない選択」、朝日新聞東日本大震災取材班、『闘う東北、朝日新聞記者が見た被災地の1年』、朝日新聞出版社

⁹ 震災前の馬場氏のネットワークは、本研究を参照されたい。

¹⁰ 詳細は、以下の聞き取りから。

C1「癪に障るのは、行政とか国で、私は、瓦礫処理の工場で、今年いっぱいはまだ働いていたはずなんだけど、半年早く切り上げられて、外に瓦礫をやったりしているでしょ。そういうのを残していてくれれば、私

たちいくらでも稼ぐ事ができたのに。（略）地域の復興は出来るかもしれないけど、個人個人の復興はどうなるんだろう（略）震災後働こうと思ったら、夏くらいから、もうそろそろ転職を考えなければならないけど、突然辞めるように言われたら、他所に仕事を求める事が出来ない。結局 50 代、60 代、70 代の人たちは、私も含めて仕事があるはず無いじゃないですか。政府も復興のための予算を全く関係無い所で使ったりして、一生懸命働いていきたい人にはお金が回って来なくて、それって個人の復興なんですかって思ってしまう訳ね。」

- ¹¹ センのケイパビリティ論は、能動的主体としての個人における自由の開発や発展の目的、指標として強調するが、一方で、センがここで描いているものについて、宮崎は、以下のように捉えるべきであると述べている。「諸個人を主体とする自由のシステムの連関と言って良い。その連関を産出する主体（＝自由な存在）としての個人を目的・指標とすることによって、同時に社会の構造が審判されることを考えれば、個人主義という評価は当たらない。むしろ、センの議論は、システムを形成する根源的主体の解放論として読み込む可能性を与えていると評価すべきであろう」（宮崎隆志、2009、「ソーシャル・キャピタルとケイパビリティ：移行過程支援との関連で」、『社会教育研究』、PP.23-24）。つまり、ケイパビリティは、個人の自由を形成する社会システムを対象とする。